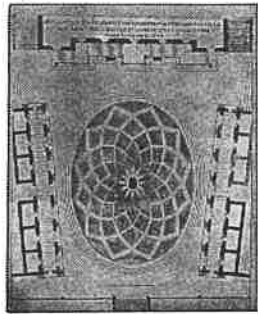


福竜丸だより

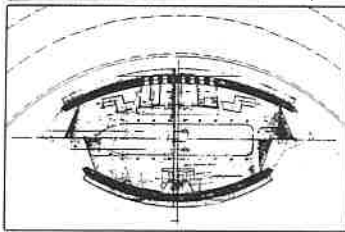
都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494



つい先日イタリアを訪れた折、ローマのカンピドリオ広場に感を得た。イタリア・ルネッサンスの画家・彫刻家・建築家であるミケランジェロの素描によるものであり、三つの建物によって囲れた小ざっぱりとした広場である。左右の建物は世界最古の公開博物館であり、平行ではなく、やや先づきまに配置されている。正面の建物はかつての元老院であり、現在ローマ市庁舎となっている。



私が感を強くしたのは、この広場の楕円形の床である。楕円形の部分は周囲の床畳みから数段落ち、わずかなサンクガーデンとなっている。中央の騎馬像の部分の床は、十二の星状の模様となっており、一つの星から楕円の帯状の模様が周囲に伸び、再び隣の星にもどってくる。大変幾何学的であると共に、自由な達意が感じられ、正に理性と感性が

カンピドリオ広場(上)

織りなす天才の技である。楕円は二つの点からの距離の和が等しい点の軌跡である。楕円は、内部に向って収斂すると共に、外部のものに対して自らを拡散する。内と外とを包み込む形である。ある建築家は、体育館・オーデトリウム等の大空間の内部について、内部より見て凸になっている空間、例えば釣膜構造の様な場合、どうしても瘦せた空間になってしまう。これに反して、内部より見て凹の空間には豊かさが感じられると云う自論を述べていた。

展示館

杉重彦

設計が依託された。所長杉のもと、和泉伸一が中心となって設計が進められた。当初は長辺が三十六米、短辺が十四米の矩形の平面の上家であったが、段々と現在の様な二つの円弧が貝殻状に福竜丸を包む様な形に収斂されて行った。この折、船・海・貝殻・技術と云う図式が強く脳裡にあった。二枚の貝殻状の外皮は、上部の直線状のトップライト部分で寄りかかっており、天に向う気持、願望の気持をも訴えている。昭和五十年九月十二日に起工式が行われた。地盤は四十五米まで軟弱であり、六十種径の鋼管杭が上家のために十本、福竜丸のために三本打込まれた。難しい形態、構造、材料等、施工には多くの努力が注がれた。工事中夢の島の他の工事現場で亜硫酸ガス噴出の事故があり、床を砂利敷にするに云った方策も構えられた。

第五福竜丸は、大変多くの皆様の並ばならぬ熱意と努力により平和運動を担って来た。当初、年間数万人の来訪者も二十万人を超えることとなった。ビキニ被爆より三十八年、展示館開設より十六年、世界が大きく変動する中、第五福竜丸の保存・展示は、人類の歴史・文化の伝承と云う役割を永く担っている。今後長期的視点に立脚して、例えば博物館法の適用と云ったことも含め、第五福竜丸を中心とした文化の伝承を進めて行く重要な時に来ている。(建築家・協会評議員)

展示館開設十六周年を記念して懇談会開く



松本楼でひらかれた展示館開設記念懇談会

六月十五日、日比谷公園の松本楼で、協会主催の第五福竜丸展示館開設記念懇談会が開かれました。開館記念日の六月十日に前後して毎年開かれていた恒例の祝賀会で、今年十六周年目、関係者およそ四十人が出席しました。主催者を代表したあいさつの中で川崎会長は、前年度は第五福竜丸乗組員の手記出版、ビキニ事件に関する外交文書の公開はじめ、福竜丸への関心が一段と高まり、多くの来館者を迎えたことを報告しつつ、展示館がその本物の真価

を発揮するのはこれからと感謝と決意を述べました。来賓のあいさつをされた東京都南部公園緑地事務所の大関東支夫所長は、「展示館開設の前、美濃部都知事と共にあって、みなさんの要望を聞き建設に苦勞したことがあった」と当時の思いを語り、いま展示館への期待と都民の要望にそい、一層の充実へとも知恵と汗を出しあいたいと激励されました。服部学理事の司会により、石井あや子顧問の乾杯ではじまった懇

「千人鶴の集い」や反核平和の火リレー

梅雨、大きな船首越しに展示館の窓から見下ろすあじさいが立派な花を咲かせて、修学旅行の中学生の見学が続きます。京都、兵庫、和歌山、愛知、三重、岐阜と毎日数校づつ、前後の訪問地の予定もあって早朝、閉館時間間際、中には休館の日曜日もなんとかとの申し出もあるほど。愛知県春日井市、津山市の中学校は、都内見学を各班の自由行動で行なっていると、展示館見学は一班六名というミニ

版。それでも事前に「質問事項」を送り、さらに見学後みんなでお話しして質問を重ねるなど中身の濃い学習会でした。東京狛江市の中央公民館主催の見学会は九月まで七回におよぶ市民ゼミナール「世界の平和と日本の役割」のひとつ。政治・経済・軍事・環境・核問題と地域のお母さんを主体とした学習会で「今日は校外実習」と、展示された久保山さんの絶筆「死の床にて」を書

談会は、保存運動当初からの関係者はじめ、青年・婦人・市民運動の担い手、科学者、ジャーナリストがつきつきに激励と提言をされ、和気あいあい。日本被団協の山本典英事務局次長は被爆者援護法をめぐる状況と運動の新たな展望について述べ連帯の拍手に包まれました。大石又七さん、NHKの「又七の海」の製作スタッフも出席し、その後の反響などひとしきり話はずみしました。来年は協会設立二十周年、そしてビキニ事件四十周年の一九九四年にむけ、いくつかの記念行事を企画し成功させようと、その出発ともなった懇談会でした。

資料・写真の寄贈 七月三日、NHKの東野真さんが来館。スペシャル番組製作にあたり苦勞して収集したビキニ事件に関するアメリカ側の分析資料、諸文書が協会に寄贈されました。また大石又七さんからも番組のために古いアルバムから選んで拡大パネルにした事件当時、ふるさとの小学校・中学校の記念写真など四十点余が贈られました。

き写される婦人もあって熱心な見学でした。毎月最初の日曜日、久保山記念碑前で、被爆者を囲み被爆の体験の継承をすすめる「千人鶴の会」の青年も梅雨空のもと集いを持ち、江東区、江戸川区の青年たち三十名も六月十六日、展示館前で「第四回反核平和の火リレー」の発表集会を開催。広島で採火した火をたいまつにともし、第五福竜丸、米軍横田基地を結ぶ十二日間のマラソンリレーに出発しました。



反核平和の火をかかけマラソンリレー出発

本土復帰二十年の沖縄①

自らの歴史と文化の見直しへ

岩 垂 弘

沖縄が日本に復帰してから、この五月十五日で二十周年を迎えた。新聞の世論調査によれば、県民の八八%が「復帰して良かった」と考えているという。復帰十年の一九八一年には六二%だったというから、復帰ということに対する満足度は年を経るごとに高まってきているというだろう。

そのせいだろう。沖縄の人々の表情はとも明る。昨年の秋から今年五月まで四回にわたって沖縄を訪れる機会があったが、そのたびに、そんな印象を強くした。確かに、この二十年で沖縄は大きく変わった。街は大きくなり、モダンな高層ビルが増えた。商店や住宅も立派になった。道路も見違えるように立派になり、港や河川の整備も進んだ。公共施設も充実した。私が初めて沖縄を訪れたのは復帰前の六九年のことだが、そのころとは様変わりである。県民の生活も豊かになった。そ

のことは、住宅の構え、自家用車、食事や娯楽などの消費生活全般にわたってうかがえる。もっとも、それでも県民一人当たりの所得では今なお全国最下位で、全国平均の七割ぐらいいかに達していないが。

いづれにしても、こうした変化は、もちろん沖縄の人々自身の努力に負うところもあるが、政府による多額の公共投資があったことも見逃せない。復帰後、政府による公共投資はざっと三兆四千億円にのぼる。県民一人当たりざっと三百万円になる。米軍基地の縮小・撤去問題など、難しい問題が山積してはいるが、とにかく県民の顔が明るいのには、二十年前に比べて自分たちの生活がともかくにも向上したためだと思われる。

が、沖縄の人々の心に触れてみると、その明るさの裏で、沖縄の人々の間で複雑な心情が芽生えて

いることが分かってくる。それは一言で言えば「復帰で生活は確かに豊かになった。だが、その一方で失ってきたものもまた多いのではないか」との思いである。沖縄の人の話によれば、この二十年で失われたものの一つは、沖縄の自然だ。開発が全島で行われ、その結果、自然破壊が進んだという。とりわけ、自然破壊がすすまじいなと思われせられるのは沖縄本島北部の山原(やんばる)地方だ。山林資源の開発や、ダム、道路などの建設で原生林の伐採が進み、豊かな原生林に覆われていた山岳地帯はいたるところ、赤土が露出し、山容を変えてしまった。このため、ここを住みかとする、世界的に貴重な生き物であるヤンバルクイナ、ノグチゲラなどが次ぎ次ぎと生息地を追われ、絶滅の危機にある。

(ジャーナリスト)

知られざる北極海の核被害

豊 崎 博 光

昨年から今年の春にかけて、スカンジナビア半島に接するロシア北西部、北極地域の核汚染の実態が次々と新聞に載った。見出しを列挙してみよう。○北極に核廃棄物—コンテナに詰め二十三年間、ソ連が浅海に投棄(九一年九月) ○原子炉の炉心も北極圏の海底に—ソ連投棄の確認文書を手(九一年十月) ○ソ連原潜建造基地—放射能漏れ事故(九一年十一月) ○旧ソ連、原潜解体で放射能漏れ?—コラ半島、許容の六十倍(九二年二月) ○北の海に眠る汚染の、時限爆弾—旧ソ連の核廃棄物、全欧の脅威(九二年二月) ○核汚染によるがん?—アザラシ数千頭死亡(九二年四月)

新聞記事を読んでいて暗然たる気持ちになっていた。加えてこの地域にはノバヤゼムリヤ島という核実験場があり、かなり前からそれによる被害も懸念されていた。とくに「核汚染によるがん?アザ

ラシ数千頭死亡」という記事は衝撃的だった。

そんな時、テレビ朝日の「ザ・スクープ」という番組のプロデューサーから電話が入り取材に出かけることになった。テレビ朝日は白海で行われているアザラシの調査船に乗る許可を得ていたが、私は旧ソ連の原潜基地があるコラ半島のムルマンスク、ノバヤゼムリヤ島の核実験の被害を受けている先住民ネネツ人の住むナリヤンマルへの取材も勧めた。

五月初め、アルハンゲリスクに入った私たちはすぐに白海でアザラシの調査をしている北極研究所海洋生物研究所所長のY・ティモシエンコさんを訪ねた。白海は春とはいえまだ厚い流水が漂っていた。ティモシエンコさんは、アザラシが数千頭もがんで死んだというのは嘘の記事だが、近年、白血病のアザラシが増えており、このままでは近い将来数千頭が死ぬ

だろう。白血病の原因は北極海に捨てられた核廃棄物とノバヤゼムリヤ島での核実験の死の影によるものだった。

この後、コラ半島のムルマンスクを訪れた私たちは、原子力潜水艦の基地を取材することはできなかったが、北極海に旧ソ連が大量の核廃棄物を捨てたという証言をえた。核技術者で、原子力砕氷船に七年間乗っていたというA・ゾロツコフさんは、「旧ソ連は、厚さ数ミリのコンテナに入れた軍用と一部民間使用の固形核廃棄物(東欧諸国の原発の廃棄物も含む)一万一千個をノバヤゼムリヤ島東海岸の浅瀬に捨てました。この中には原子力砕氷船レーニン号の原子炉もありました。またバレンツ海には液体核廃棄物一万六千立方メートルを何の処理もせずに捨てました」と投棄場所の地図をみせながらいった。

そして、「この数字は核廃棄物を捨てた船の船長から直接得たものですが、実際はもっと多く、コンテナにして数万個、液体廃棄物は数万立方メートルが捨てられていると思います」と。最後に私たちは、ナリヤンマル

の南東約三〇キロ、ツンドラ地帯でトナカイを追って暮らすネネツ一家を訪れた。三角形のチュムと呼ばれるテントで暮らすネネツ人の暮らしは平和であった。しかしネネツ人たちの間では、体内のセシウム137の量が平均よりも十、百倍高く、食道がんが多くみられている。それはノバヤゼムリヤ島での核実験によってトナカイの餌のヤゲリという苔が汚染され、それで汚染されたトナカイをネネツ人たちは主食としているからである。

「この地域の放射能汚染については何も聞いていません。私たちはトナカイしか食べる物が無いのです」と、人びとはいった。わずかに四週間の取材で私たちが見たことは核汚染のほんの一部である。今後、北極圏についてはさらに詳細な調査が必要とされる。今年の九月にはベルリンで「第二次核被害者世界大会」が開かれる予定だが、セミパラチンスク実験場、チェリヤピンスク核兵器開発施設、チェルノブイリ原発事故と共に北極圏の核被害は大きな問題となるであろう。(フォト・ジャーナリスト)